

我らは主のもの

ルカによる福音書 20 : 9 - 19

20:09 イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。 20:10 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した。 20:11 そこでまた、ほかの僕を送ったが、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせないで追い返した。 20:12 更に三人目の僕を送ったが、これにも傷を負わせてほうり出した。 20:13 そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』 20:14 農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』 20:15 そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。 20:16 戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」彼らはこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。 20:17 イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。

『家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった。』

20:18 その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」 20:19 そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。

イエス様が復活なさったとき、受難と十字架の死は預言され予告されていたことだと語られました。イエス様の受難予告は、全部で3回ありますが(9:21以下, 9:43以下), 実はその他にもそれを暗示する箇所はたくさんあります。今日の「ぶどう園と農夫」のたとえもそうです。

神様は特別に選ばれたイスラエルの民つまりぶどう園を治めることを、民の指導者たちつまり農夫に委ねました。そして度々神様の意志を伝えるために、僕である預言者を遣わしましたが、かれらを迫害しました。最後に愛する息子、つまりイエス様を遣わしたのですが、十字架で殺してしまいました。主人に子どもがいない場合、その財産は雇い人のものになるという決まりがありましたから(創世記15:2), 主人の息子が死ねば合法的にぶどう園を取り上げることができたということが、こ

のお話しの背景にあります。旧約聖書以来、神の民をぶどう園にたとえる伝統があり(イザヤ5:1以下, エレミヤ12:10以下, 詩編80:9以下, ヨハネ15:1以下), ぶどう園=イスラエルということは聞いた人ならだれにでも分かりました。この話が民の指導者へのあてつけであるということは明らかでした。

一般の民衆にとっても、このたとえはショックでした。「そんなことがあってはなりません。」と彼らは応じます。マタイによる福音書では、最初の受難予告のときに、ペトロが「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」と言ってイエスを叱ったとあります(マタイ16:21以下)。けれどもそのペトロも、裁判の庭でイエスを三度拒みました。民衆も同罪です。彼らもイエスを「十字架につけよ」と叫ぶ側に回りました(23:21-22)。指導者だけでなく、民衆も、弟子たちですら罪があるのです。

どんな罪でしょうか。それは神のものを神のものとして、自分のものにしようとした罪です。この前の問答も、この後の問答も、実は同じ主題を扱っています。つまり支配と権力は誰のものかということです(20:2, 20:25)。支配者たちは、何が正しくて何が間違っているかを自分たちで判断する権限があると思っていました。本当は神様から託されたものであったはずなのですが、いつの間にか自分の欲で決めるようになり、民衆を苦しめ、ついにはイエスを殺してしまうところまで来てしまったのです。民衆にしても、弟子たちにしても、主に聞き願うというのではなく、自分の思いが結局は優先されていた点で同罪です。

「そんなことがあってはなりません」と思っているのは私たちも同じではないでしょうか。「主のものを奪うなって、そんなことはありません。」けれどもすべてが神のものであるということを忘れて、自分で思い通りにして良いと思っていることはないでしょうか。日本人は親子心中が世界一多い国だといわれています。それは「子どもは私のもの」という思想があるからです。カール・ジブラーンという人が書いた「預言者」という本にはこうあります。「あなたの子は、あなたの子ではありません。…あなたを通してやってきますが、あなたからではなく、あなたと一緒にいますが、それでいてあなたのものではないのです。子どもに愛を注ぐが良い。でも考えは別です。子供には子どもの考えがあるからです…。」私たちはものを食べる時、「日用の糧を今日も与えたまえ」と祈ってしっかりと「これは神様からいただいたもの」と思って食べているでしょうか。私は自分で反省しなければならないと思っています。自分の体…これは神様から預かっているもの、そう思って大切にしているでしょうか。パウロはわたしたちの身体を「神の神殿である」と言います(Iコリント3:16-17, 6:19, IIコリント6:16, 他)。何一つ自分のものではありません。神様からお預かりしているものです。コリントの信徒への手紙一の4章7節でパウロはこう言っています。「いったいあなたがたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか。もしいただいたのなら、なぜいただかなかったような

顔をして高ぶるのですか。」

神様から所有権を奪い取ろうとすること、これが罪の本質です。けれども神様はイエス様を復活させることでこの罪を克服してくださいました。「『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった』」(20:17)。これはお分かりのように、復活を指しています。人々が棄てたイエス様が、私たちが神の神殿として建て上げる親石となってくださったというのです。私たちは、自分の罪に気づいて「打ち砕かれ」「押しつぶされ」たときに(20:18)、再び神のものとして回復させられるのです。「主は打ち砕かれた心に近くいまし、悔いる霊を救ってくださる(詩編34:19)。「あなたによって打ち砕かれたこの骨が喜び躍るように(詩編51:10)。「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を、神よ、あなたは侮られません」(詩編51:19)。「わたしたちは主のもの、その民、主に養われる羊の群れ」(詩編100:3)。